

メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への 来日宣教師夫人の貢献

齋藤 元子

はじめに

19世紀アメリカのプロテスタント教会は、海外伝道に多大な情熱を注ぎ、多くの宣教師をアジア、アフリカの異教地に送り出した。そして、世紀後半には、宣教師の数は女性が男性を上回るようになった。この現象は、男性宣教師の妻として異教地に渡った女性たちの運動に端を発している。

宣教師夫人らは現地の女性の生活を目の当たりにし、その虐げられた姿に強い衝撃を受けた。そして、異教徒のなかでもまず女性が、キリスト教の福音によって救われなければならないと痛感したのだが、現地の因習が障害となって、男性宣教師が現地の女性に近づくことは困難であった。そこで、彼女たちは異教女性への伝道に専従できる独身の女性宣教師の派遣が不可欠であるとの思いを強くし、アメリカ本国への報告書において、女性宣教師の派遣を要請し、休暇で一時帰国した際には、各地の教会を回って、その必要性を説いた。宣教師夫人たちの活動はアメリカの女性を動かし、プロテスタント教会の教派ごとに、女性宣教師を派遣するための組織として、女性海外伝道協会が女性教会員の手によって結成された。そして、19世紀末には、1200人以上の女性宣教師が世界各地で異教女性への伝道に携わるまでになったのである。

宣教師夫人は、異国で夫を支え、子どもを育てながら、クリスチャンホームを維持していくことに大半のエネルギーが消費され、自ら伝道活動に乗り出して行くゆとりはほとんどなかった。なかには強い使命感から伝道を試みる者も

いたが、健康を害する結果となり、伝道地からの報告書に宣教師の妻の名前が載る場合は、その多くが彼女の死を告げる時であると言われたほどである¹。したがって、異教女性への伝道は専ら彼女たちの働きかけにより派遣された独身女性宣教師に委ねられた。

では、宣教師夫人の女性海外伝道運動への貢献は、女性宣教師の派遣を本国アメリカに要請し、それを実現させた点だけにあったのであろうか。伝道地において、女性宣教師を助け、女性海外伝道運動の推進を図るような宣教師夫人の活動が、上述したこと以外にもあったのではないだろうか。従来、女性海外伝道運動に関する研究は、異教地へと渡った女性宣教師とそれを送り出したアメリカの女性海外伝道協会のメンバーに焦点が当てられ、宣教師夫人の関与を論じたものは、管見の限りにおいては、見当たらない。本論文では、女性海外伝道協会のなかで最大の規模を擁していたメソジスト監督派教会を事例として、これまでほとんど論じられなかった女性海外伝道運動の協力者としての宣教師夫人の働きについて明らかにすることを目的とする。

論文の構成としては、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の成立とその活動を概観した上で、宣教師夫人の女性海外伝道協会の活動に対する貢献について論じることとする。特に、日本という伝道地に焦点を当て、来日女性宣教師の活動を宣教師夫人がどのようにサポートしたかを明らかにしたい。

1. メソジスト監督派教会女性海外伝道協会

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会(The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church)は、インドに赴任した宣教師夫人の要請を受け、8名の女性教会員によって、1869年3月にボストンで結成された。同年11月に2名の女性宣教師をインドに送り出したのを皮切りに、中国、日本、南米、メキシコ、アフリカ、ブルガリア、朝鮮、イタリアへと派遣を開始し、1895年までの約25年間で、その数は267名に及んだ。この間、アメリカ国内の会員数は15万人を超え、プロテスタント教会のなかで最大の女性海外伝道

¹ 齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記 ―明治期における米国メソジスト教会の海外伝道―』新教出版社、2009年、36～37頁。

協会に成長した²。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会による日本への女性宣教師派遣は1874(明治7)年に始まる。現在の青山学院の起源となる女子小学校、救世学校、海岸女学校を創設したドーラ・スクーンメーカー(Dora Schoonmaker)が最初の赴任者である。その後、明治の末年までに、83名の女性宣教師が来日し、東京、横浜、函館、長崎、福岡、名古屋、弘前、仙台、米沢、鹿児島に女学校を設立し、女子教育を通じて、日本の女性へのキリスト教伝道を試みた³。

2. 機関誌 *Heathen Woman's Friend*

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、発足の3ヵ月後、*Heathen Woman's Friend*(『異教女性の友』)と題する機関誌の発行を開始した。*Heathen Woman's Friend*には、女性宣教師からの報告をはじめとする伝道地に関する記事、各地の支部報告などアメリカ国内の活動に関する記事、献金状況や会計収支の報告などが掲載された。

*Heathen Woman's Friend*は月刊誌として創刊され、1896年には“heathen(異教の)”という語のもつ異教徒を非文明人として見ているようなイメージを払拭しようとする意図から、誌名を *Woman's Missionary Friend* に変更し、1940年8月まで70年以上にわたって発行され続けた⁴。

機関誌は、異教地で活動する女性宣教師とアメリカ本国でその支援活動を展開する女性会員とをつなぐコミュニケーションのツールとして、重要な機能を果たしていた。*Heathen Woman's Friend*には、異教地の風俗・習慣、さらには、その国の歴史や地理などを紹介する女性宣教師からの報告書簡が毎号複数掲載されている。

筆者は、*Heathen Woman's Friend*に掲載された日本関係記事を分析した論考において、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会による日本への女性宣教師派遣が開始された初期の頃には、女性宣教師よりも、宣教師夫人からの報告書

² 前掲書1, 45~46頁.

³ 前掲書1, 46~47頁.

⁴ 前掲書1, 54頁.

簡が多く掲載されていることを指摘した。そして、その理由として、女性宣教師たちは女学校の設立など活動の足場作りに多忙であり、宣教師の妻たちがアメリカの会員に向けて日本を紹介する役割を引き受けていたのではないかと推察した⁵。これは、まさに宣教師夫人によるサポート行為であり、筆者が本論文の冒頭で提起した「宣教師夫人の女性海外伝道運動への貢献は、女性宣教師の派遣を本国アメリカに要請し、それを実現させた点だけにあったのであろうか」という疑問に対して、否という回答を提示する根拠となりうるものである。

次章から、日本に在住したメソジスト監督派教会宣教師夫人が、機関誌 *Heathen Woman's Friend* を通じて日本紹介をどのように展開したかを明らかにし、女性宣教師への支援として、延いては女性海外伝道運動への貢献としての宣教師夫人の活動を論じることとする。

3. Children's Corner と宣教師夫人

Heathen Woman's Friend のなかには、創刊当初より“Children's Corner”と名づけられた子ども向けのコーナーが毎号設けられていた。“Children's Corner”は1881年2月号より“Children's Department”と名称を変えた後、1880年から *Heathen Children's Friend* という独立した雑誌として刊行されるようになる。1896年には、*Heathen Woman's Friend* が *Woman's Missionary Friend* に変更されたのに伴い、*Heathen Children's Friend* も、*Children's Missionary Friend* となった。

Heathen Woman's Friend に子ども向けの読み物を掲載したのは、将来の宣教師を育成するという目的に加えて、協会の資金源として、子どもからの献金にも期待するものがあったからである。女性海外伝道協会は、女性教会員のみで構成された組織であるがゆえに、大口の献金先を期待することは難しく、小額の献金を多数集める努力をしなければならなかった。よって、子どももその対象とみなされたわけである。“Children's Corner”には、女性宣教師から送られてきた異教地の童話や子どもたちの話が掲載された⁶。

前章において、日本への女性宣教師派遣開始期における *Heathen Woman's*

⁵ 前掲書1, 51頁.

⁶ 前掲書1, 48頁.

Friend に掲載された日本関係記事は、宣教師の妻により書かれたものが多かったという筆者の調査結果を述べたが、この傾向は、上記の子ども向けコーナー“Children’s Corner”において、より顕著であるといえる。

“Children’s Corner”以外の成人会員向け日本関係記事は、女性宣教師派遣開始の1874年から1878年までの約5年間、他の雑誌からの引用を除くと、すべて宣教師夫人によって書かれていた⁷。一方、“Children’s Corner”の日本に関する読み物は、今回新たに調査をした結果、1877年の5月号に最初に登場し、1881年まで、書籍や他雑誌からの引用を除くと、同じくすべて宣教師夫人によるものであることが明らかとなった。調査結果を、一覧表として以下に示す。

Children’s Corner における日本関係記事

	書き手	タイトル
1877年5月号	Mrs. Lucy Ing	The little women of Japan in the nursery
6月号	Mrs. Lucy Ing	The little women of Japan in the schoolroom
1878年7月号	Mrs. Flora Best Harris	Little chrysanthemum I
8月号	Mrs. Flora Best Harris	Little chrysanthemum II
11月号	<i>The Mikado’s Empire</i> からの引用	The Japanese fan-makers
12月号	<i>Helping Hand</i> からの引用	The dolls of Japan
1879年1月号	<i>Missionary Link</i> からの引用	Japanese holiday
2月号	Mrs. Flora Best Harris	The little old woman
5月号	Mrs. Flora Best Harris	An “Out-of-the-way corner”
	<i>Children’s Work for Children</i> からの引用	The feast of flags
1880年1月号	<i>Child-life in Japan</i> からの引用	The good little step-san
7月号	<i>Child-life in Japan</i> からの引用	The parsley queen
	selected	The kites in Japan
9月号	<i>Missionary Link</i> からの引用	Japanese children

⁷ 前掲書1, 229頁.

Heathen Woman's Friend (Vol.8～Vol.12-7) より抽出

1877年から1880年の5年間に“Children's Corner”に掲載された日本関係の読み物は15話を数える。そのうち7話がミセス・イング (Mrs. Ing) とミセス・ハリス (Mrs. Harris) という2名の宣教師夫人により書かれており、半数を占めていたことになる。

表中に引用文献として示されている *Helping Hand* はバプテスト派、*Missionary Link* は超教派の各女性海外伝道協会機関誌、また *Children's Work for Children* は長老派女性海外伝道協会の子どもの向け機関誌⁸である。

The Mikado's Empire は、アメリカ人日本研究家ウィリアム・エリオット・グリフィス (William Elliot Griffis) の代表的な著書である。グリフィスは、1871(明治4)年来日し、福井藩の藩校明倫校や大学南校・開成学校(ともに東京大学の前身)で化学や物理などを教えた。1874(明治7)年に帰国した後、*The Mikado's Empire*(1876)をはじめとして、*Japan: In History, Folk Lore and Art*(1892)、*The Religions of Japan*(1895)など、多数の日本に関する著作を発表した。*The Mikado's Empire* には、明治初期の日本の姿が、平易な言葉で、生き生きと描かれており、成人のみならず、子どもでも興味深く読むことができる内容である。よって、*Heathen Woman's Friend* の“Children's Corner”のほか、上に紹介した長老派教会女性海外伝道協会の子どもの向け機関誌 *Children's Work for Children* にも *The Mikado's Empire* からの引用文が掲載されている⁹。

Child—life in Japan は、マティルダ・チャプリン・エアトン (Matilda Chaplin Ayrtton) という英国人女性により、英国の子どもたちに向けて書かれた本であり、1879年にロンドンで出版された¹⁰。エアトンの夫は、お雇い外国人教師と

⁸ *Children's Work for Children* に関しては、次の文献に詳しい。齋藤元子「*Children's Work for Children* —米国長老教会女性海外伝道協会発行子どもの向け機関誌—」, 明治学院大学キリスト教研究所紀要 41, 2008, 53～82頁。

⁹ 前掲書8, 67頁。

¹⁰ 同書は上笙一郎編『日本<子どもの歴史>叢書 8』(1998年 久山社刊)に収

して 1873(明治6)年に来日し、工部省工学寮(東京大学工学部の前身)で初代教授を務めたウィリアム・エドワード・エアトン(William Edward Ayrton)である。彼女は女医として当時の英国で草分け的存在でもあり、夫とともに 1879(明治12)年まで日本に滞在した間、日本の助産婦育成にも尽力した¹¹。

Child-life in Japan は 14 の読み物から構成されている。筆者は、“Children’s Corner”に掲載されている文章と *Child-life in Japan* との照合を試みた。その結果、“The parsley queen” (1880 年 7 月号掲載) は、同じタイトルで 1 話の全文が収録されていた。一方、“The good little step-san” (1880 年 1 月号掲載) は、同じタイトルが見当たらず、“The scrap-book”というタイトルの話の一部を抜粋したものであることがわかった。したがって、“The good little step-san”というタイトルは、*Heathen Woman’s Friend* の編集者が独自につけたものと考えられる。ちなみに、教育学研究者の中江和恵によれば、“The parsley queen”は聖徳太子と膳妃とをモデルにした説話が原話とのことである¹²。

以上見てきたように、“Children’s Corner”の日本関係記事は、日本伝道開始期においては、宣教師夫人からの寄稿と他教派機関紙ならびに日本関係書書からの引用によるもので構成されていた。つまり、寄稿に関しては、宣教師夫人の協力に全面的に依存していたことが明らかである。

筆者が以前に実施した調査から、*Heathen Woman’s Friend* の成人会員向けの日本関係記事は、1879 年以降、書き手の中心が女性宣教師へと移行したことが認められるが¹³、“Children’s Corner”はどうであっただろうか。前掲の表以降、“Children’s Corner”は“Children’s Department”と名称変更した後、1890 年に *Heathen Children’s Friend* として独立雑誌となる。その間、同コーナーに掲載さ

録されている。また、中江和恵によりその一部が翻訳されている(中江和恵 『『チャイルドライフ・イン・ジャパン』に描かれた明治初期の日本の子ども』, 和光大学現代人間学部紀要 1, 2008, 124~140 頁)。

¹¹ 本田和子『“Child-Life in Japan”と“Children of Japan”解説』(前掲書 10 上笹一郎編 『日本<子どもの歴史>叢書 8』所収) 1~2 頁。

¹² 前掲書 10 中江和恵 『『チャイルドライフ・イン・ジャパン』に描かれた明治初期の日本の子ども』, 141 頁。

¹³ 前掲書 1, 229 頁。

れた日本関係記事は15を数える¹⁴。その書き手を類型化すると、宣教師夫人1、女性宣教師6、書籍・他雑誌からの引用4、その他4となり、書き手の主体が、成人会員向け同様に、女性宣教師に移行していたことがわかる。

この流れを宣教師夫人の観点から整理してみると、日本への女性宣教師の派遣が開始された1874年から1878年頃までは、機関誌 *Heathen Woman's Friend* における成人会員向けの日本紹介記事の執筆を、宣教師夫人が主体的に担っていた。そして、1877年頃からは、“Children's Corner”における子ども向け日本紹介も宣教師夫人が引き受けるようになった。つまり、1880年頃までは、宣教師夫人が協会機関誌を媒介とするあらゆる年齢層に向けた日本についての広報活動を担っていたといえることができる。

4. ミセス・イングとミセス・ハリス

本章では、“Children's Corner”を通して、明治初期の日本の様子をアメリカの子どもたちに伝えた二人の宣教師夫人ミセス・イングとミセス・ハリスについて、その人物像を紹介したい。

ミセス・イングは、メソジスト監督派教会宣教師ジョン・イング (John Ing) の妻ルーシー(Lucy Elizabeth Ing)である。夫ジョン・イングは、弘前に赴任した最初のメソジスト宣教師である。1874(明治7)年来日し、弘前教会の創立に本多庸一とともに尽力し、東奥義塾で最初の学生改宗者に洗礼を施した¹⁵。また、津軽地方にリンゴ栽培を紹介したことでも知られている。

ミセス・イングは、マサチューセッツ州にある名門女学校マウントホリヨーク・セミナリーの出身で、結婚前は公立学校の教師をしていた¹⁶。マウントホリヨーク・セミナリーは、女子教育のパイオニア、メリー・ライオン (Mary Lyon) により、1837年に創設され、同校をモデルとした姉妹校が、その後、全米各地に作られた。また、マウントホリヨーク・セミナリーは、多くの教師を育成し

¹⁴ *Heathen Woman's Friend*, Vol.12-8(1881)~Vol.21(1889)より抽出。

¹⁵ ジャン W. クランメル編『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年』教文館、1996、130頁。

¹⁶ 前掲書15、130頁。

ており、開校後 40 年間は、卒業生の 70 パーセントが初中等教育機関の教師となっていた¹⁷。ミセス・イングもその一人であったといえる。

東奥義塾の女子部はミセス・イングによって始められたといわれており、一日 2 時間の授業を受け持っていた¹⁸。また、材料を持って訪ねてくる少女たちに編み物も教えた¹⁹。前掲の表にある“Children’s Corner”のミセス・イングによる“The little women of Japan in the schoolroom”(1877 年 6 月号掲載)は、クラスの光景をレポートしたものである。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、1889(明治 22)年弘前に女性宣教師を派遣し、弘前女学校を開校した²⁰。ミセス・イングは 1878(明治 11)年に帰国していた²¹ため、女性宣教師による女子教育活動を支援する機会は持たなかった。しかし、女学校設立の 10 年前に、教師経験を生かして、ミセス・イングが弘前の少女たちに教育を施していた事実は、彼女によって女子教育の種がまかれていたことを示している。

もう一人の宣教師夫人ミセス・ハリスは、メソジスト監督派教会宣教師メリマン・ハリス (Merriman Colbert Harris) の妻フローラ (Flora Lydia Best Harris) である。夫メリマン・ハリスは、北海道に赴任した最初の宣教師である。1873 (明治 6) 年に来日し、1874 (明治 7) 年から 1877 (明治 10) 年まで函館に在住した。1878 (明治 11) 年に東京の築地に移り、一時帰国を除いて、生涯を日本で過ごし、夫婦ともに青山墓地に埋葬されている²²。

ミセス・ハリスは著述を得意としていた。*Heathen Woman's Friend* への寄稿のみならず、紀貫之の『土佐日記』を翻訳し、詩集も出版している。また、超教派の女性宣教師マクニール (S.B.McNeal) が 1876 (明治 9) 年に横浜の山手で

¹⁷ 前掲書 1, 41~42 頁.

¹⁸ 本多繁『続・米国のプロテスタンティズムと日本人 一忘れられた明治の基督敎学校と宣教師達一』明治プロテスタンティズム研究所, 1994, 113 頁・122 頁.

¹⁹ 安田寛・北原かな子「弘前における洋楽受容のはじまり」, 弘前大学教育学部紀要 79, 1998, 57 頁.

²⁰ 前掲書 18, 87 頁.

²¹ 前掲書 19, 57 頁.

²² 前掲書 15, 107 頁.

創刊した日本語による子ども向けキリスト教児童雑誌『よろこばしきおとづれ』への最大の寄稿者でもあった²³。

前掲の表が示すように、ミセス・ハリスは“Children’s Corner”に四つの読み物を寄稿している。“Little chrysanthemum I・II”(1878年7月号・8月号掲載)は、武家出身の娘である「キク」という名の少女について記したものである。“An out-of-the-way corner”(1879年5月号掲載)は、貧しい家庭の子どもたちの学びの様子を報告している。“The little old woman”(1879年2月号掲載)と“The tongue-cut-sparrow”(1880年12月号掲載)は、それぞれ日本の昔話『若返りの水』と『舌切り雀』の翻訳であり、『土佐日記』の翻訳と合わせて、ミセス・ハリスの日本文学に対する造詣の深さがうかがえる。

5. Children’s Corner が伝えた日本

では、宣教師夫人は、具体的にどのような日本の姿をアメリカの子どもたちに伝えようとしたのであろうか。“Children’s Corner”が最初に掲載した日本に関する読み物であるミセス・イングの“The little women of Japan in the nursery”(1877年5月号掲載)の筆者による拙訳を示し、その内容を考察してみたい。この読み物は、“Children’s Corner”の多くの読者にとって初めて日本を知る機会となったものであろう。

日本の少女たち —子守りの風景—

(The little women of Japan in the nursery)

ミセス・ルーシー・H・イング

日本では幼い少女たちが赤ちゃんを背中におんぶして歩いたり、遊んだりしている光景を目にすることは珍しいことではありません。赤ちゃんは、「帯」と呼ばれる便利な紐で、いつも安全に少女たちの背中に括られています。

²³ 齋藤元子「『よろこばしきおとづれ』—地理教育からみた明治初期のキリスト教児童雑誌—」, 明治学院大学キリスト教研究所紀要 40, 2007, 69~70頁。

小さな赤ちゃんは、お姉さんの上着にしっかりと包まれていて、頭しか見えません。頭は、帽子を被っている時もあれば、被っていない時もありますが、片方の手が少女の肩の上からよく出ているのを見ます。

少女たちは、時々、赤ちゃんをおんぶしたまま、走り回ったり、手足を使ってボール遊びをしたり、飛び跳ねたりしています。そんな時、赤ちゃんの頭は上下に揺れていますが、機嫌よく笑っているか、あるいは、あたかもベッドの中にいるように、スヤスヤと寝ています。私は、小さな少女が、彼女自身とほとんど変わらない大きさの赤ちゃんをおんぶしている姿を何度か見たことがあります。

日本のお人形の話をする時、泣き声が出る等身大の人形から、紙で頭や手や衣服が精巧に作られた小さな人形まで、大きさや種類には、ほとんど際限がないと言えましょう。ある日、私は大きな間違いを犯しそうになりました。それは、大きな人形を本物の赤ちゃんと見間違えて、もう少しのところで「赤ちゃんのご機嫌はいかが?」と聞きそうになったからです。直前に気がついて、笑われずに済みましたが・・・。

また、別の日、招かれたあるお宅の一室を覗いてみると、かわいい孫娘のためにたくさんのご馳走が用意されていました。低いテーブルの上に、果物、焼き菓子、アメが並んでいたのですが、そこには一家を模った人形も飾られていました。紳士とその妻の人形は高貴な姿をしています。紳士は高価な絹の衣服を身につけ、腰には刀を差しています。妻は絹と縮緬で作られた優雅な着物を纏っています。その紳士夫妻は目立つ位置に堂々と置かれています。夫妻よりも地位の低い、その他の人形は、それぞれの身分にふさわしい場所に置かれています。

孫娘たちが家の中を遊び回ろうと、人形が飾られた部屋を出て行った時、男の子たちは、女の子たちを驚かせようとして、人形に悪ふざけをしました。高貴な紳士夫妻の人形の頭を反対向きに回し、妻の髪の中におもちゃのブリキ製のお盆を差し込みました。いたずらをしたかと思うと、男の子たちは急いで逃げていきました。

日本では、小さな女の子が愛らしい人形を抱いたり、おんぶして道歩いているのをよく見かけます。いつか、皆さんは、日本の人形祭りについ

て、聞く機会があるでしょう。このお祭りは、今よりも昔のほうがより盛大でしたが、2月から3月の間に祝われます。

Heathen Woman's Friend, Vol.8-11(1877),261p.

以上が、筆者による“The little women of Japan in the nursery”の拙訳であるが、“Children's Corner”の読者と同年代の日本の少女たちの姿とその少女たちが愛する人形についての描写がなされている。

日本の少女たちが、便利な「帯」であるおんぶ紐を用いて乳飲み子を背負い、子守りをしながら遊んでいる光景は、アメリカの少女たちにカルチャー・ショックを与えたのではなかろうか。また、洋の東西を問わず、人形は少女を魅了するものであり、日本人形の多種多様さは、アメリカの少女たちの興味を喚起したに違いない。

ミセス・イングは、既述したように、教師の経験があった。その経験は、アメリカの子どもたちが関心を抱くようなトピックの選択、平易な文章、自らの失敗談などエピソードを交えた面白いストーリー展開などに生かされていると見ることができよう。そして、この読み物は、アメリカの子どもたちへの異文化教育の教材でもあったといえる。

おわりに

本論文は、来日メソジスト監督派教会宣教師夫人の同教会女性海外伝道協会への関与を考察することを通して、これまでほとんど論じられてこなかった宣教師夫人による女性海外伝道運動に対する貢献を論じることを試みた。

本論文から浮かび上がってきたものは、女性海外伝道協会が女性宣教師を派遣して間もない時期、言い換えれば、女性宣教師が活動の基盤作りに多忙な時期に、女性宣教師に代わって、異教地に関する知識や情報を積極的に発信していた宣教師夫人の姿である。

とりわけ、宣教師夫人は、母親あるいは教師としての経験を生かして、子どもが興味を引くような異教地の話を、より長期間にわたって、中心的に書き送

っていたことが明らかとなった。

宣教師夫人は、伝道活動に専従できなかったがゆえに、本国アメリカに独身女性宣教師の派遣を要請した。この事実は知られているが、派遣された女性宣教師の活動を具体的にどう支援したかは未検証のままであった。そのため、宣教師夫人は、女性海外伝道運動とは一線を画していた、さらには、女性宣教師とは折り合いが悪かったというような捉え方すらなされていたのではあるまいか。

本論文により、宣教師夫人は、異教地に着任した先輩として、女性宣教師の活動がスムーズに進むように、自らが得意とする子ども向け情報の発信を中心に、異教地のことをより多くのアメリカの会員に知ってもらえるよう力を尽くし、女性海外伝道運動の推進に貢献したということを例証できたと考える。

今後の研究課題として、インドや中国など、日本以外の異教地においても、宣教師夫人による同様の貢献が認められるか否かを明らかにする必要がある。

(お茶の水女子大学 講師)